

2025

実践レポート集



社会福祉法人 太樹会



社会福祉法人 太樹会 第15回 実践報告

中期経営計画 2027

4 専門性と支援の質の追求

2022年4月～2027年3月の5カ年計画



Page	Title	Department
P4 ~ 5	外国人社員へ引き継ぎと連携を円滑にする	吉野ユニット 三輪ユニット
P6 ~ 7	誤嚥性肺炎の予防に向けた口腔ケアの実践	二上ユニット 和里（にこり）, SW, CM
P8 ~ 9	料理を通じた生活者と支援員の関係づくり	飛鳥ユニット 葛城ユニット
P10~11	暮らしの記録を繋げる力に ～記録や情報共有に関する課題と改善に向けて～	龍田ユニット 高円ユニット
P12~13	看取り支援における支援職の役割について考える ～状態変化の早期発見, 観察力の向上を目指した取り組み～	白虎ユニット 朱雀ユニット
P14~15	協カユニット間でのストーマ対応（夜間帯）における 物品の管理方法について	青龍ユニット 玄武ユニット
P16~17	和里（にこり）の看取り3年計画！ ～看取りを深めよう～	医務室
P18~19	社員が健康でありつづけるために ～健康経営の取り組み～	総務職
P20~21	盛り付けを通して, 生活者の食事の満足度を高める	栄養職
P22~23	介護医療連携による褥瘡ケアのバトン ～デイサービス発の気づきが在宅生活を支える～	デイサービスセンター和里（にこり）




P24~25	社員間のコミュニケーションの現状を知る	大和ユニット 天羽ユニット 和里（にこり）香芝, CM
P26~27	引継ぎシートの作成 ～大切な情報を次のケアへ～	万葉ユニット 飛龍ユニット 和里（にこり）香芝, SW
P28~29	“バトン” でつなぐ支援 ～その人らしい暮らしをチームで支える～	デイサービスセンター和里（にこり）香芝 ケアプランセンター



P30~31	引き継ぎを確実にし, 社員間で情報共有する	香具ユニット 畝傍ユニット
P32~33	口腔ケアを強化することで口臭改善を目指す	耳成ユニット 和里（にこり）香芝II, CM



Rank	Department	Title	Page
	和里（にこり） デイサービスセンター和里（にこり）	介護医療連携による褥瘡ケアのバトン ～デイサービス発の気づきが在宅生活を支える～	P22～23
	和里（にこり）香芝 デイサービスセンター和里（にこり）香芝 ケアプランセンター	“バトン” でつなぐ支援 ～その人らしい暮らしをチームで支える～	P28～29
	和里（にこり） 医務室	和里（にこり）の看取り3年計画！ ～看取りを深めよう～	P16～17
4	和里（にこり）香芝Ⅱ 耳成ユニット 和里（にこり）香芝Ⅱ, CM	口腔ケアを強化することで口臭改善を目指す	P32～33
5	和里（にこり） 三輪ユニット 吉野ユニット	外国人社員へ引継ぎと連携を円滑にする	P4 ～ 5

外部評価の皆さま、ご多用のところご協力ありがとうございました。
惜しくも入賞にならなかった皆さま、報告ありがとうございました。



二上ユニット 飛鳥ユニット 葛城ユニット 高円ユニット
龍田ユニット 玄武ユニット 白虎ユニット 青龍ユニット 事務室



天羽ユニット 飛龍ユニット 大和ユニット 万葉ユニット 事務室



香具ユニット 耳成ユニット



外国人社員へ引き継ぎと連携を円滑にする。

私たち

部署： 吉野ユニット，三輪ユニット

施設名： 和里（にこり）

報告者： 大辻 栄統・駿河 利弥

取り組みのねらい

外国人社員が困っていることを明確にすることでユニットリーダー・日本人社員がより適切にサポートでき，スムーズな人財育成につながることをねらいとして取り組みを行った。

現状，外国人社員の引き継ぎ・ケース記録などの育成で困っていること，日本人社員がサポートしていることに相違があるのではないかと考えた。ユニットリーダー及び日本人社員が外国人社員の困りごとが何かを理解し，適切なサポートを行うことで，人財育成につながると考えた。



取り組みの内容

外国人社員用のアンケート，ユニットリーダー用の2種類のアンケートを作成し配布。

外国人社員が困っていること，してもらえると嬉しいサポートのリストアップ。ユニットリーダーが指導を行うにあたって困っていることをリストアップする。

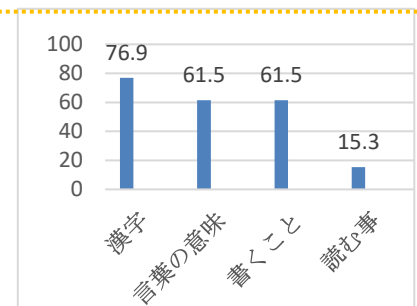
取り組みの成果

アンケート結果の統計（アンケート期間令和7年11月16日～12月7日）

<外国人社員アンケート結果>13名の解答

1. 日本語を使うなかで，難しいと感じる事はなんですか？

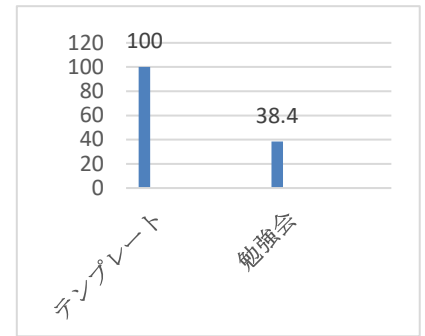
→漢字76.9%（10名），言葉の意味61.5%（8名）
書くこと61.5%（8名），読むこと15.3%（2名）



2. ケース記録・事故報告書・ヒヤリハットなど
を書かなかでどうしたら記録がしやすいと考
えますか？

→テンプレートが欲しい100%（13名）

記録についての勉強会38.4%（4名）

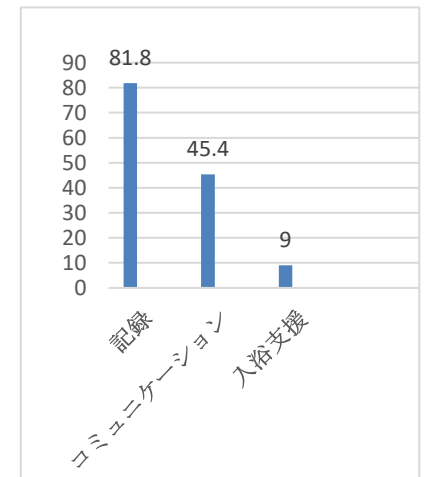


<ユニットリーダーアンケート結果>11名の解答

1. 現在勤務のなかで外国人社員が、苦手又は難し
いと思う支援は何ですか？

→記録81.8%（9名）コミュニケーション

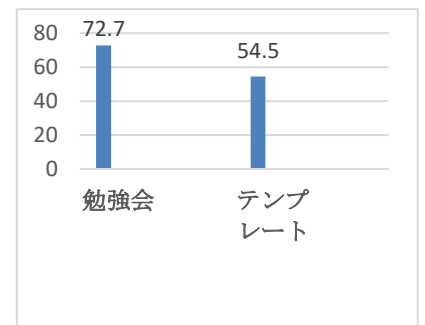
45.4%（5名）入浴支援9%（1名）



2. 法人として、外国人社員に記録を
入力して頂くためにどのような方法が
あれば助かりますか？

→記録に対しての勉強会72.7%（8名）

テンプレートの作成54.5%（6名）



取り組みの成果

アンケート結果として、日本語を書くこと、漢字、
言葉の意味は繰り返し勉強会を行うことで、理
解を深めることができると考える。

ケース記録・報告書は、双方テンプレートが
欲しいことが分かった。アンケート結果の報告
は、リーダー会議で今回実施したアンケート
結果を共有し、ケース記録や各種報告書で使え
るテンプレートを作成することを提案し、今後
の指導や支援に活用することとする。

また、外国人社員に対しては、日本語勉強会や

EPAフォローアップ部会において、アンケート結果を伝え、今後の日本語支援体
制の充実に役立てることができればと考える。お互いの苦手としている所を共有
することができ、日本語を学習するなかで支え合うことができると考える。

今後も外国人社員の入職が考えられるため、この取り組みで分かった課題を外
国人社員の指導・教育に活かしていければと思う。



誤嚥性肺炎の予防に向けた口腔ケアの実践

私たち

部署： 二上ユニット，介護支援専門員職，相談職

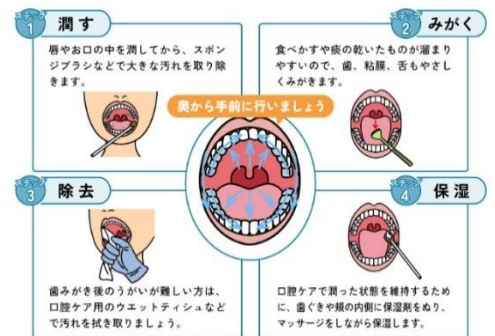
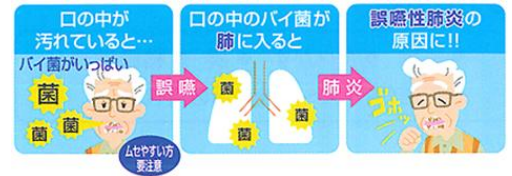
施設名： 和里（にこり）

報告者： 金崎 莉奈・増田 千晶

取り組みのねらい

歯科衛生士と連携し，専門的な知識と支援のバトンをつなぎ口腔ケアを実践する

一般社団法人 日本訪問歯科協会によると，高齢者においては，嚥下機能の低下から，口腔内の汚れや乾燥が誤嚥性肺炎の発症に繋がることが多く，日常的な口腔ケアの重要性が高まってきている．特に介護度の高い高齢者は自身によるセルフケアが難しいため，適切で継続的な支援が求められている．当事業所でも，嚥下機能の低下や口腔内の清潔不良から誤嚥性肺炎のリスクが高い生活者が見られ，社員間でのケアの質のばらつきも課題となっていた．定期的に往診に来ている歯科衛生士から「日常的な口腔ケアの徹底が肺炎予防につながる」と助言を受け，改めてケア方法を見直す必要性を感じた．そこで，法人内研修で学んだ口腔ケアの手技やポイントを社員間で共有し，日常的に継続して取り組むことで，誤嚥性肺炎の予防だけでなく，生活者一人ひとりの口腔環境の改善とケアの質の向上につなげることを目指したい．



取り組みの内容

ニ上ユニット生活者2名を対象に、研修で学んだ口腔ケアを4カ月間実践し、取り組み前後の評価をおこなった。

対象：Aさま 誤嚥性肺炎の既往歴あり

Bさま 嚥下状態不安定

期間：8月～11月の4か月間、日常の口腔ケアに加えて週2回実施

方法：研修で学んだ工程を写真で順序だて、実践する際に手技を確認できるようにした。上顎の粘膜部分の汚れはスポンジブラシで落とし上下の歯周囲も同様に丁寧に掃除した。歯間も、縦横磨きを3回～5回丁寧に繰り返しおこなった。



取り組みの成果

実践とともに生活者、社員双方の意識と行動が徐々に変化し、口腔ケアの質の向上が見られた。

OHATの事前評価は、0点（健全）～16点（病的）中、A様が5点、B様が6点、事後評価は、A様が5点、B様が5点と大きく変化することはなかった。しかし、実施ごとに記録し共有を徹底したことにより、社員間で磨き方などケアの質が安定した。また、生活者自身も鏡を見て自ら丁寧に歯磨きを行いケアに取り組むなどの意識変化が顕著に認められた。今回の取り組みの習慣化により、日常的な口腔内の清潔保持が安定し、社員の関わりを起点とした支援のバトンが生活者自身へと引き継がれた。今後は、他生活者に向けても実践および定着を目指し、より一層ケアの質が向上できるよう取り組みたい。

ORAL HEALTH ASSESSMENT TOOL 日本語版(OHAT-J) (Oikawa JM et al. 2005 著作権保留)

項目	名前: A 様	1ヶ月前評価	評価項目	スコア
口腔	口腔粘膜	口腔粘膜、口唇、口角の赤み、乾燥	口腔粘膜、口唇、口角の赤み、乾燥、出血、口角のひびき、潰瘍	0
舌	舌苔、舌炎	舌苔、舌炎、赤み	舌苔、舌炎、赤み、潰瘍	2
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	1
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	0
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	1
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	1
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	1
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	0

ORAL HEALTH ASSESSMENT TOOL 日本語版(OHAT-J) (Oikawa JM et al. 2005 著作権保留)

項目	名前: B 様	1ヶ月前評価	評価項目	スコア
口腔	口腔粘膜	口腔粘膜、口唇、口角の赤み、乾燥	口腔粘膜、口唇、口角の赤み、乾燥、出血、口角のひびき、潰瘍	0
舌	舌苔、舌炎	舌苔、舌炎、赤み	舌苔、舌炎、赤み、潰瘍	1
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	2
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	0
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	1
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	0
歯肉・粘膜	歯肉炎	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ	歯肉炎、出血、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	2
歯冠	歯冠の汚れ	歯冠の汚れ、歯垢、歯石	歯冠の汚れ、歯垢、歯石、歯肉の腫れ、歯肉の潰瘍	0

料理を通じた生活者と支援員の関係づくり

私たち

部署： 飛鳥ユニット, 葛城ユニット

施設名： 和里（にこり）

報告者： 吉田 和也・藤本 由美

取り組みのねらい

外国人社員が母国の料理を振舞い、生活者との交流を通じてお互いの気持ちをつなぎ、かかわりを深めることをねらいとした。

この取り組みでは、『食』をきっかけに、生活者と支援員がふれあい、お互いをより深く知る機会をつくることを目的とした。

和里（にこり）では、EPA（経済連携協定）による外国人社員の受け入れがあり、葛城 ユニットでも生活者との関係は良好であると感じている。もっと関わりが深まるような機会が作れないかと考えた。

そこで今回は、外国人社員には母国の料理を振舞ってもらい、一緒に食を楽しみながら交流を図ることにした。生活者には普段とは異なる味や食体験を楽しんでもらい、支援員にとっては自分の国のことを知ってもらう場になればと考えた。

日本で働くなかで、自分の国のことを語る機会が少ない社員にとっても励みになり、自信につながる取り組みになるのではないかと考えた。



取り組みの内容

生活者と外国人社員と一緒に、母国のフィリピンの料理を作り、「食」を通して交流を深めた。

事前に生活者と家族へ取り組み内容を説明し、写真の使用や個人情報への扱いに配慮することを伝え、発表以外では使わない点も了承を得て実施した。生活者2名と外国人社員2名で、協力してフィリピン料理を作り、できあがった料理を楽しみながら交流を深めた。取り組み後は支援員へ聞き取りを行い、感じたことや気づきを話してもらい振り返りとした。



取り組みの成果

生活者が料理や食事を楽しみながら、支援員と笑顔で交流する姿が見られた。

生活者が野菜を切り、料理の香りに「いい匂い！」と話しておられた。盛り付けの際には「これは何の料理？」「パーティーみたいね」と興味を持ち、支援員と一緒に皿を選ぶ場面も見られた。食べる際には「おいしいね」という言葉や、デザートの原料について質問があった。普段は食事を残される方や、やわらか食の方もすべて召し上がり、笑顔があふれる時間となった。支援員への聞き取りでは「楽しかった」「生活者が母国の料理を喜んでくれてうれしい」「別のフィリピン料理も食べてもらいたい」との声があり、食を通して生活者と支援員とのかかわりをより深められたことが感じられた。生活者との交流を楽しみながら、支援員の自信や意欲にもつながった取り組みとなった。



暮らしの記録を繋げる力に ～記録や情報共有に関する課題と改善に向けて～

私たち

部署： 龍田ユニット，高円ユニット，

施設名： 和里（にこり）

報告者： 大貫 由美・小山 敦功

取り組みのねらい

「その人らしい暮らし」を継続する。日々の記録が充実することで、チームで本人に寄り添ったケアや課題を検討できるようにする。

太樹会は、パーソン・センタード・ケアを価値基盤として、ユニットケアの実践を目指している。その理念に基づいたケアを実現するには、生活者一人ひとりの日々の暮らしや思いを記録として共有することが不可欠である。

現状は、暮らしに関する記録は少なく、定型的な支援報告に偏る傾向があり、その人らしさに寄り添うケアの継続が困難となっている。記録は本人・家族・多職種をつなぐ「情報のボタン」である。これを絶やさず繋げることで、その人の暮らしを支えるチームケアが可能となる。

「暮らしの記録を繋げる力に」をテーマとし、記録や情報共有に対する課題と改善を目標に定めた。まずは課題に対する現状調査として、事前アンケートを実施する。主な問題としてあがった記録入力をする時間の確保と記録内容に対する不明瞭さに重点を置いた改善を実践していくことにした。



事前アンケート

「暮らしの記録を“つなげる力”に」記録や情報共有に対する課題と改善に向けて

【目的】
このアンケートは、生活者の暮らしに関する記録や情報共有について、チームケアに携わる皆さんが感じている課題や疑問などを把握し、今後の改善に活かすことを目的としています。記録は、生活者の「その人らしさ」を支えるために重要な役割をもつ。本人・家族・支援員・他職種間において、「情報をつなげる力」が大切です。皆さまの貴重な声を大切にし、より良いケアの提供をづくりを進めていきたいと考えています。ご協力よろしくお願いいたします。返答は無記名で構いません。

【Q1】記録入力について

1. 記録入力の方法が難しい、困っていると感じることはありますか（複数選択可）

- 時間が足りない
- 情報が足りない
- 何を記録すればよいかわからない、内容
- 書き方が分からない、フォーマット、形式
- 記録が難しい、適切なケア記録
- 他の報告との兼ね合いで検回しになり、内容を忘れる
- その他

2. 上記の困りごとが起きている原因は何だと思いますか？

3. 記録入力に関して、改善してほしい点や工夫したいことを教えてください。

【Q2】記録内容について

2. 生活者の情報共有に関して、現場で困っていることはありますか（複数選択可）

- 申し送りや検回が少なく、十分な情報共有されない
- 情報が日課中心で、記録に残っていないことが多い
- 職種による記録の内容や形式にばらつきがある
- 情報が一元化されていない（紙や記録シート、NEXT、ほのぼの・申し送りノート、手書きメモ等に分散）
- 情報が整理されていない（必要な情報、優先順位が高い情報がどこにあるか不明、見逃している）
- その他

アンケート結果 ※一部抜粋

困りごとの分類	具体的な内容	割合
業務量・時間的制約	時間が足りない 他業務で後回しになり忘れる 記録に専念できる時間がない	約41.2%
記録内容の不明瞭さ	「その人らしさ」の記録が少ない（発言や希望など） 必要とされる記録がわからない ケアプランや24h シートの連携がとれていない	約35.3%
表現・文章の難しさ	日本語表現が難しい 文章作成能力に個人差がある わかりやすい文章、長文など読み手への負担	約11.8%
情報媒体の統一性	情報の集約媒体が統一されていない	約5.9%
個人情報と倫理整備	情報共有における個人情報の取り扱いと倫理的課題 LINE グループによる個人情報の共有について	約5.9%

取り組みの内容

休憩前後に最低10分ケース記録入力をする時間を作り，ケース記録の量を増やす。

取り組みとして，暮らしの総合記録シートの上に記載されているケアプランに沿った記録を意識して増やすために，龍田ユニットでは9/15～9/21(対象生活者：10名)，高円ユニットでは9/14～9/21(対象生活者：3名)の期間で休憩前後に最低10分ケース記録入力に専念する時間(食事量や排せつなどの定型の一括記録入力はこの時間に含まない)を作ることを実施した。

2024-01-01 05:22:50

暮らしの総合記録シート

総合的な援助の方針
各項目にそったケース記録を意識することで
記録内容の明確化とケアプランとの連携を目指す

西暦2025年

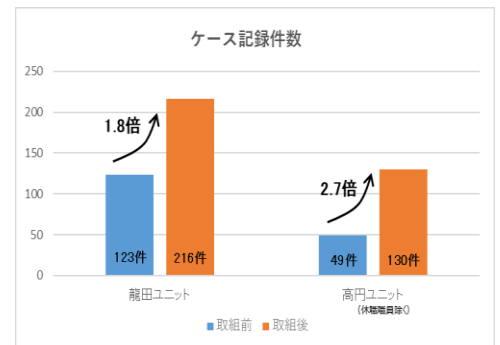
月日	11/9 (日)				11/10 (月)				11/11 (火)			
定期服薬	朝	昼	夕	寝前	朝	昼	夕	寝前	朝	昼	夕	寝前
服薬支援者												
食事	朝食	主食	副食	その他	朝食	主食	副食	その他	朝食	主食	副食	その他
	昼食				昼食				昼食			



取り組みの成果

大幅に記録件数が増加した，今後も継続して行うとともに，記録の質を高め，質の高いケアの提供につなげていく。

龍田ユニットでは，記録件数が取り組み前123件から216件と1.8倍に増加した。また，高円ユニットでも，記録件数は一人当たり2.7倍に増加した。記録時間を設定し，ルールを明確化したことで，社員の記録入力に対する仕事としての認識や責任感が高まったと考えられる。その結果，お互いの譲り合いができ，記録件数増加につながったと思われる。今後は記録件数増加に加え，ケアプランと連動した質の高い記録を目指していく。記録を通して，チームとしての連携を高め，その人が培ってきた暮らしの継続・実現を目指していきたい。



チームケアを支える「情報のバトン」



看取り支援における支援職の役割について考える

～状態変化の早期発見、観察力の向上を目指した取り組み～

私たち

部署： 白虎ユニット，朱雀ユニット

施設名： 和里（にこり）

報告者： 上村 成美・金田 卓也

取り組みのねらい

看取り支援における現状の課題の把握と支援職の役割について考える。

状態変化の早期発見には、どんな観察力が必要か明確化する。

厚生労働省による国内の介護老人福祉施設（特養）は約8,548施設「老人ホームの約8割が“看取り対応可能”とされている。しかし全国的にも、現状課題として終末期ケアに関する研修・経験が十分でない社員も多く、不安が強い。体制問題（人手・医療連携・スキル不足）などが絡み合い様々な課題が挙がっている。」和里（にこり）でも、令和6年度看取り者数16名、令和7年度12月時点で14名の看取り支援を行っている。当法人でも課題は類似しており、社員の経験値の差による、状態変化の早期発見に遅れが生じるなどのインシデントがあった。原因を分析するなかで、観察力の誤差やコミュニケーション不足も関係しているのではと考えた。まずはインタビューを通し、現状課題の把握及び、支援職の役割とは何かを考え、本人を取り巻くすべての人が、最期まで安心して暮らせる体制づくりの一步となる取り組みにしたい。

看取りに関する方針

▼特別養護老人ホーム



▼介護付き有料老人ホーム



- 「ホームで亡くなりたい」という希望があれば受け入れる
- 原則的に受け入れていない
- 無回答

出典/ 野村総合研究所「高齢者施設等における医療ニーズ対応のあり方に関する調査研究報告書」(平成30年3月より)

重度化対策 5 分会議開催について

2025.9.15 配布
(朱雀) 金田・(白虎) 上村

協力体制強化を目的とし、協力ユニット間で、看取りの方及び体調不良の生活者様を対象とした情報共有が出来る場を設ける取り組みを行います。

今回はテスト段階なので期間を設けて実施していきます。
今後継続して、5分会議を取り入れていこうと考えているのでご協力をお願いします。
また、今回取り組み改善点やもっとこうしたら方がいい等提案、質問あれば、(朱雀) 金田 U L K (白虎) 上村まで連絡下さい。

- ・期間 2025年9月22日(月)～2025年9月30日(火)
- ・参加者 早出者と進出者
- ・時間目安 15:55～16:00 (※時間は協力ユニットで話し合ってください)
- ・場所 足湯スペース

- 申し送り内容
- ①起床時～夕方までの食事量、水分量や食事時の様子
 - ②バイタル (血圧/体温/脈拍/酸素飽和度)
 - ③尿測している場合は尿量報告
 - ④呼吸状態

※5分と短い時間なので、話が脱線しないよう気をつけてください。
※お急ぎの方は 白虎/朱雀 が行ってください。よろしくお願いいたします。

取り組みの内容

- 1) 協力体制についてのインタビュー
- 2) 重度化防止5分会議の開催
- 3) 事後インタビューと観察ポイントのチェック表作成



- 1) 期間/対象：令和7年8月20日～令和7年8月31日 南館社員全25名
無記名で書面を配布. 質問事項2問

- ① 協力体制においてどんなフォローがあれば心強いのか
- ② 協力ユニットの生活者の呼吸を普段より弱く感じた場合どのような対応や連携をとるか.

- 2) 期間/対象：令和7年9月22日～令和7年9月30日
南館4ユニット協力ユニットの早出・遅出者
会議の詳細内容は南館4ユニットに書面配布.
申し送り共通事項を説明する.

- 3) 期間/対象：令和7年10月15日～令和7年10月21日
実施後インタビューを南館全25名に口頭で実施.
状態報告チェックリストの作成.

実施日時	実施場所	実施者	実施内容
			① 協力体制について
			② 協力ユニットの生活者の呼吸を普段より弱く感じた場合
			③ 南館4ユニット協力ユニットの早出・遅出者
			④ 実施後インタビュー
			⑤ 状態報告チェックリストの作成

取り組みの成果

課題「状態変化に気づく力の向上, 情報共有の拡充化」

支援職の役割「日々の支援の気づきをつなげ, 大きな安心に変える」

実施前インタビューでは, 課題と感じている内容は経験値による差があった。経験値が少ない：どの状態になったら家族へ連絡すれば良いのか. 一人での対応への不安感. 経験値が多い：情報共有内容の薄さ, 体制の在り方に課題を感じていた。5分会議でも経験値の豊富な社員は全体像視点で申し送りしていたが, 少ない社員は数字のみを報告していた。何が状態変化の早期発見につながる情報かが分からなかった様子があり, インタビューでも挙がっていた課題が実感できた。状態変化時の早期発見における必要な観察力については, 今回作成したチェックリストの項目である。それと同時に, 支援職の役割とは何かを考えた時「看取りは日常生活の延長であることを念頭に, 生活者本人, 家族とのコミュニケーションをとりながら, 環境, 体制を整えることが必要。」とも言われている。支援職は生活者とより多くの時間を過ごす。今後はチェックリストを活用し, 多角的な視点で多職種, 家族, 本人とバトンをつなぎ大きな安心に変えていきたい。

協力ユニット間でのストーマ対応(夜間帯)における 物品の管理方法について

私たち

部署： 青龍ユニット，玄武ユニット

施設名： 和里（にこり）

報告者： 的場 亮平、スティ プラバー スニサー

取り組みのねらい

生活者の必要物品の管理方法を明確にすることでスムーズな対応ができ、生活者が安心できる暮らしのサポートをおこなう。

今年度の実践発表のテーマである『バトン』から私たちが感じた、また思いついたことは、協力ユニット間での申し送りや情報共有を行うが実際にその時にならないと、物の置き場や対応に困ることを新人の時や異動して経験したことがあったことを思い出した。今回事業所でも数少ない人工肛門を造設されている、生活者のストーマ対応（夜間帯）が協力ユニット間でどこまで理解があるのか、もしストーマ漏れがあり物品やその対応のしかたを新しく入職してきた社員や異動してきた社員は知っているのかを知れる機会だと思い簡単なアンケート調査をして現状を知れたらと思う。またアンケートから意見を参考に周知できる対応につなげられたらと考えた。

取り組みの内容

協力ユニット社員へのストーマ対応における簡単なアンケートと改善案を書いてもらう。

①和里(にこり)でストーマパウチの交換に立ち会ったことがありますか？

②夜間にストーマパウチの漏れがあり夜勤専従看護師に交換を依頼したことはありますか？(夜勤専従看護師と日勤者の方対象外です。)

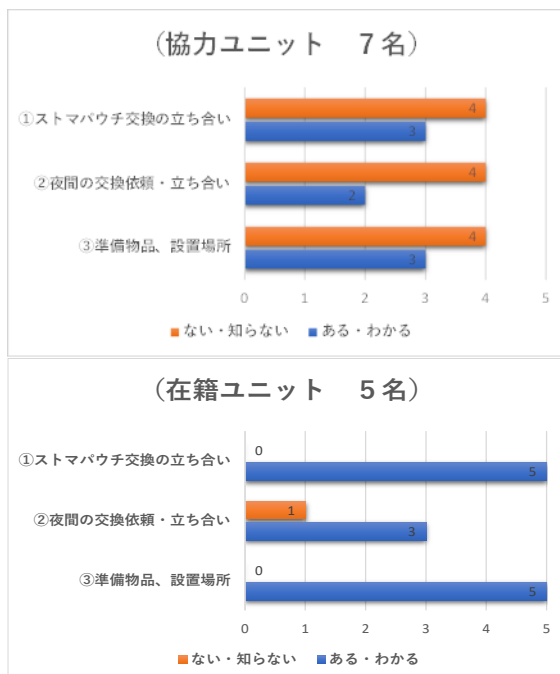
③新しい交換の用意が置いている場所を知っていますか？

今回の実践発表でストマパウチについてアンケートを取らせていただきます。	
7月17日開始、24日までに各リーダーまで提出してください。	
どちらかに○をつけてください。	
1. 和里(にこり)でストマパウチの交換に立ち会ったことがありますか？	
① はい	② いいえ
2. 夜間にストマパウチの漏れがあり夜勤専従看護師に交換を依頼したことはありますか？ (夜勤専従看護師と日勤者の方対象外です。)	
① はい	② いいえ
3. 新しい交換の用意が置いている場所を知っていますか？	
① はい	② いいえ
4. 新しい交換の用意が置いている場所などを周知するためにどの様にすれば良いか1つでも思い当たる事を書いてくださるとありがたいです。	

取り組みの成果

アンケートから見えてくる協力ユニット間でのストーマパウチについての周知度

アンケート①, ②, ③を取り, 日頃より入浴等で貼り換えに立ち会っているユニットとそうでないユニットでの違いが見えてきた. 特に無いに越したことはないが, 協力ユニットでストーマパウチの漏れを経験したことがない社員は新しい交換の用意の場所を知らないことが知ることができた. そこでアンケート4, 皆が周知できる取り組みを書いてもらった事を参考に連携をしやすいするために新しい交換の用意も含め物品の置き場所に関するマニュアル等を作成する.



和里（にこり）の看取り3年計画！ ～看取りを深めよう～

私たち

部署： 医務

施設名： 和里（にこり）

報告者： 永田 昌美・後藤 純子

取り組みのねらい

施設全体で看取りについて考え意思疎通を図り、
生活者が最期までその人らしく生きることを支える

今年度は例年に比べ多くの生活者の看取りを実施したが、本当にその人らしい最期が送れたのか、家族は満足できたのか、社員は十分な支援が実施できたのか、支援の際に不安なことはなかったか、など様々な疑問が出てきた。

看取りの際には関わる人たちの価値観が大きく影響を及ぼすため、本人・家族・社員で価値観を共有し、同じ方向を向くことで本人が望む看取りの実施に近づくことができると考えるが、EPA社員も増え、年齢・経歴・出身・性別などが多様化しており、社員間の認識が統一されていないように感じ、今回看取りに着目し深めることにした。

まず、1年目に死や看取りに対するアンケートを実施し、結果に基づき研修をする。2年目で実践・修正し、3年目にまとめ、和里（にこり）の看取りの方向性を決定し、次世代へバトンをつないでいく。

看取りアンケート

- 死に対するイメージ（複数回答可）
 - ・怖い ・尊い ・不安 ・自然な事 ・宗教の教え
 - ・考えたことがない ・次の世界に行ける
 - ・全て無になる
- 看取りの際困ったこと・心配な事がありましたか（複数回答可）
 - ・声掛けの仕方
 - ・具体的に何をしたらいいかわからない ・看取り自体
 - ・死の兆候や呼吸の変化 ・食事や水分の支援方法
 - ・臨終の際いつご家族様も呼んだらいいのか
 - ・入浴方法・タイミング ・体位・姿勢
 - ・家族とのコミュニケーション
 - ・困ったことはない
- 看取りケアの際やそれ以前に看取りについて話し合いはしましたか（複数回答可）
 - ・ユニット内 ・ご本人様 ・ご家族様
 - ・していない ・その他（ ）



取り組みの内容

社員へアンケート調査の実施

- ① 死に対するイメージ
- ② 看取りの際に困ったこと・不安なこと
- ③ 看取りについての話し合いの有無, の3項目を主とした。

取り組みの成果

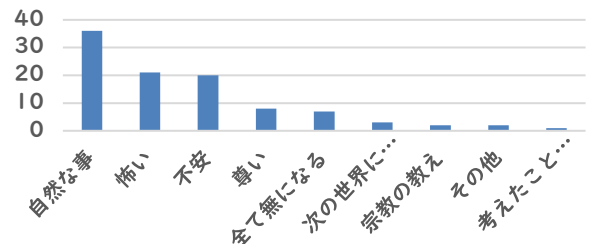
社員間で統一した認識を持つことができ、知識を深められた。

①では、死生観に国籍・経験年数

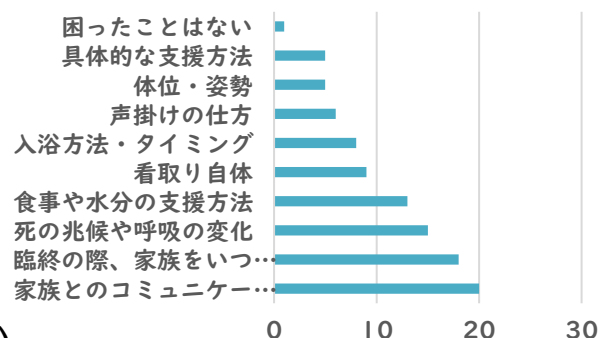
・職種の差はなかった。また、死に対する否定的な意見は少なかったが、怖い・不安と人間の二面的な心理が浮き彫りになったといえる。②においては結果の差が狭かった。前回の法人内研修が6年前ということもあり、看取りに対する知識が全体的に浅いものと推測される。③では社員間での話し合いは進んでいるが本人・家族との話し合いの割合が低いことから、支援の方針が社員内で完結してしまい、本人・家族の意思が反映されていない可能性が示唆される。

以上の結果を以て、10月から法人内研修を実施し、基本的な知識の習得・共有ができてきたと考える。それにより、社員の看取り支援に取り組む姿勢や意識が高まり、最期の瞬間をより良いものにしようと、死に対し真摯に向き合う姿を感じられるようになってきた。しかし一方で、「看取りやしな」と諦めに似た発言が聞かれるのも事実である。看取りはいつ亡くなってもおかしくない状態、という認識ではなく、看取りだからこそできることを考えていけるよう今後の課題として、本人・家族を含めたカンファレンスやグリーフケアの実施を考慮し引き続き看取りの考察を深め、2年目の発表にバトンを繋げたい。

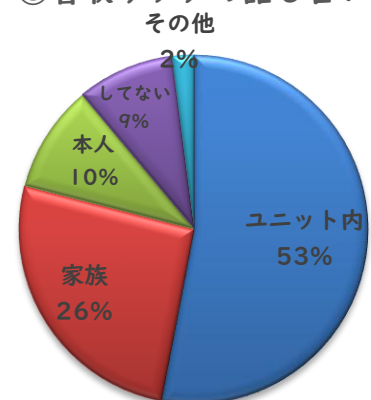
①死に対するイメージ



②困った事・心配事



③看取りケアの話し合い



社員が健康でありつづけるために ～健康経営の取り組み～

私たち

部署： 総務

施設名： 和里（にこり），和里（にこり）香芝

報告者： 山本 由佳里，平口 智恵

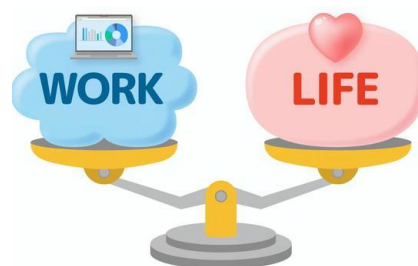
取り組みのねらい

社員の健康を「経営の重要な資源」と捉え、心身ともに健やかに働ける環境を整える取り組みを社員により具体的に伝える。

2025年度、法人は「健康経営優良法人」に初めて認定された。本認定は、社員の健康を大切にし、働きやすい職場づくりに真剣に取り組んでいる法人として国から評価を受けた証である。人口問題研究所によると、25年後に日本の人口は1億人を切ると推計されており、約2,500万人減少する。社員の健康管理に配慮することは重要な業務であると同時に経営戦略上についても重要な取り組みである。

健康経営とは「健康診断やストレスチェックの充実」「睡眠や食生活の情報提供」「職場のコミュニケーション活性化」「有給休暇取得促進や柔軟な働き方の支援」などがある。

認定による法人のメリットは「生産性の向上」「離職率低下」「法人イメージの向上」社員側のメリットは「心身の健康向上」「働きやすい職場環境」「福利厚生充実」「法人への信頼と満足度向上」などがあげられる。



取り組みの内容

全社員を対象に健康についてのアンケートを実施，健康に関心を持つ取り組みを追加，実施した。

健康経営申請時アンケートを実施し「ストレス解消のため健康を損なう可能性があるとしながら続けている生活習慣」値が高いとわかり（2022年度63.8%，今回64.5%）外部講師による社員向けセミナーを実施した。



【メンタルヘルスマネジメント
～メンタルヘルスは他人事ではない！】

健康診断に2018年腫瘍マーカー，2023年大腸がん検査を追加した。

誰もが働きやすい環境づくりへの思いから生理用品を備品化する取り組みを導入した



取り組みの成果

ひとつの取り組みが，健康経営につながることを認識してもらえた。

社員向けセミナーでは「自分が最もストレスを感じる要因を知れた，自身でできるセルフケアを取り入れます，自己診断で客観的に自分を見ることができた」などの感想があった。

健康診断の項目を増やすことで所見あり割合が70%（2024年奈良県60.7%・全国59.4%¹⁾）で早期発見・治療，その後の健康な生活を続けるための重要なサインであり安心感へとつなげた。環境作りの一環として「職場のロリエ（日本ネーミング対象2025最優秀賞受賞）」について，のべ52人（3ヶ月間）が利用し，急な時の不安が解消されたなど好評であった。

長寿企業を支える日本の最大の資源は「人資本」であり，人を中心とする健康経営を目指したい。そして全社員が働きながら健康というバトンを受け取れるよう，取りくんでいきたい。

健康診断項目導入の課程

	受診人数	所見あり	割合	備考
R7	145	101	70%	
R6	143	97	68%	
R5	137	84	61%	大腸癌検査スタート
R4	125	75	60%	
R3	148	100	68%	
R2	153	103	67%	
R1	125	76	61%	
H30	143	88	62%	腫瘍マーカースタート



腫瘍マーカー
検便

1) 参考資料奈良労働局：奈良県の労働衛生の状況より 2025.8.8

盛り付けを通して、生活者の食事の満足度を高める

私たち

部署： 事務室

施設名： 和里（にこり）

報告者： 中川 真紀子

取り組みのねらい

一人ひとりに合わせた食事内容を提供することにより、生活者の食事に対する満足度を上げる。

日々の暮らしの中で食事は楽しみの一つである。

生活者一人ひとりに合わせた食事を提供するために、それぞれの好みや食事内容を把握することは必要である。生活者の好みなどは24Hシートに記載しているが、日頃の様子から判断し、確認しておくことが重要である。しかし現在はキッチン内で社員が盛り付けをし、配膳することが多く、生活者の食事の好みを十分に把握しているといえない。今回の調査の目的として、各ユニットでのアンケートを通して、盛り付けの実態を調査し、課題を抽出、改善案を検討し実践する。その結果をうけて、今後のユニットでの盛り付けの改善と、生活者の食事の満足度を一緒に上げることをねらいとする。

ユニットにおける盛り付け方法の実態調査アンケート

今回の実践発表のテーマである、ユニットにおける食事の盛り付け方法について、各ユニットにアンケートを取らせていただきたいと思います。

対象の職員は、夜勤専従者以外の全ての支援職です。

下記の質問に対し○×で答えていただき、×の際は自由記述欄にその理由をご記入ください。回答後のアンケート用紙はユニットリーダーの方で回収して頂き、本館事務所の中川までお願いします。

お忙しいと思いますが、ご協力よろしくお願い致します。

☆以下の質問に○×でお答えください

- ① 盛り付けを始める前に、食事をされるか確認している ()
- ② 入居者が席についてから食事を提供している ()
- ③ 食事の盛り付け等の作業ができる入居者には、手伝いをしてもらっている ()
- ④ 個人持ちの箸・スプーン・食器でお出ししている ()
- ⑤ 箱食、洋食等の料理に応じた食器に盛り付けて提供している ()
- ⑥ 食事の量を伺いながら盛り付けている ()

- ① 食事の盛り付けの際、美味しく見えるように彩りを考えて盛り付けている ()
- ② おかずは一度、笑顔等にとまどめてリビングに持っていく、入居者の目の前でひとり盛り付けている ()
- ③ 飲み物は何を飲まれるか、温かいが冷たいかも確認し、その方が食事をする際に入れるようにしている ()
- ④ 食事を配膳する際、献立を説明している ()
- ⑤ 冷めた料理は温めなおすか意向を確認し、その方の適温でお出ししている ()

☆自由記述欄（×があれば、その理由も記入してください）

回答ありがとうございました。

取り組みの内容

太樹会の全ユニットで盛り付けに関するアンケートを実施。アンケート結果を元に課題を抽出し、改善策を検討して実施・評価する。

① アンケート調査

太樹会の全ユニットの支援職（夜勤専従者除く）に盛り付けに関するアンケートを実施。実施期間は令和7年6月25日から7月9日までの14日間。

② ユニットでの盛り付け業務

アンケートで×の回答が多かった3問について、3ユニットで一緒に盛り付け作業をおこなった。



取り組みの成果

盛り付けを任せることにより、ご本人に意欲が増していく様子があった。また、いつもと違う食事の状況で生活者の笑顔と高揚感を感じられた。

普段は社員がキッチン内で盛り付けを行っていたが、生活者に聞いて盛り付けをすると、いつも少な目に盛っていた方も、もっと入れてほしいと希望され、完食していた。また、普段食事を残される方も、自分で量を決めると完食していた。この結果をうけて、自分で食事を目でみて、どれだけ食べられるか決めることで、よく食べていただけるのではないかと考えられる。社員の声として、「生活者の笑顔と高揚感を感じた。」「盛り付けを任せることにより、ご本人に意欲が増していく様子もみられた。」との感想があった。これをうけて、一緒に盛り付けをすることや、食べる量を決めていただくことは、生活者自身に食事に対する満足感を与えるのではないかと思われる。今回は3ユニットでの実施だったが、この結果をうけて、今後他のユニットでも盛り付け方法を考えるきっかけになれば良いと感じた。



介護医療連携による褥瘡ケアのバトン ～デイサービス発の気づきが在宅生活を支える～

私たち

部署： デイサービス

施設名： 和里（にこり）

報告者： 明石 美和子

取り組みのねらい

デイサービスは「観察の最前線」。利用者の身体変化を発見できる場である。身体変化発見後の外部との医療連携を強化し情報とケアをつなぐバトンとなる実践を共有する。

デイサービスにおける入浴支援は身体保清だけでなく家族が気づきにくい変化を発見できる重要な機会である。I様※のサービス開始2週間後、入浴担当の支援職より尾骨部亀裂を報告され看護師が褥瘡と判断。写真を用いてご本人に共有しケアマネ・訪問診療医へ報告・訪問看護師と連携開始した

取り組みの内容

デイサービスでの気づきを起点に看護師が連携し、難治性褥瘡の原因を解明し在宅生活を支えた。

初期対応としてアズノール塗布+不織布+フィルム保護し、デイサービス利用中は側臥位時間を確保して除圧に努めた。自己排便の習慣が創部悪化に影響している可能性から、排便・浣腸を看護師が実施し、訪問看護師とは連絡帳で情報共有を行った。3か月経過しても改善が見られず、医師指示のもとユーパスタに処置変更。サービス担当者会議で訪問看護師から皮膚排泄ケア認定看護師の同行訪問を提案された。

※事例：I様
 ・71歳・男性・頸椎性頸髄症による下半身麻痺あり歩行困難・要介護4
 ・膀胱直腸障害みとめ自己導尿・自己排便実施、夜間ナイトパルン装着
 ・利用サービス：デイサービス（当施設）2回/週
 デイケア1回/週・訪問リハビリ1回/週・訪問看護2回/週・訪問診療1回/月
 ・福祉用具：車椅子/特殊寝具/床ずれ防止用具/歩行器
 ・必要な看護：自己導尿と自己排便のための場所の確保と見守り・入浴後の身体観察とケア



認定看護師・訪問看護師・デイサービス看護師・訪問診療医を含む褥瘡ケアチームを結成。LINE WORKSで連携を強化し、デイサービス内部でも看護師グループで情報共有しながら一貫した処置を継続した。「臀部皮膚の摩擦と浸軟」を褥瘡の原因としフィルムドレッシングの効果的な固定方法についてレクチャーを受けた。しかし「自己摘便やウォシュレットでフィルムが剥がれる」「自分でユーパスタを塗っていた」などの行動が判明し浸軟の原因が明確となった。リンデロンVGとパウダーを組み合わせた処置へ変更し創管理の方向性を本人とも統一した。

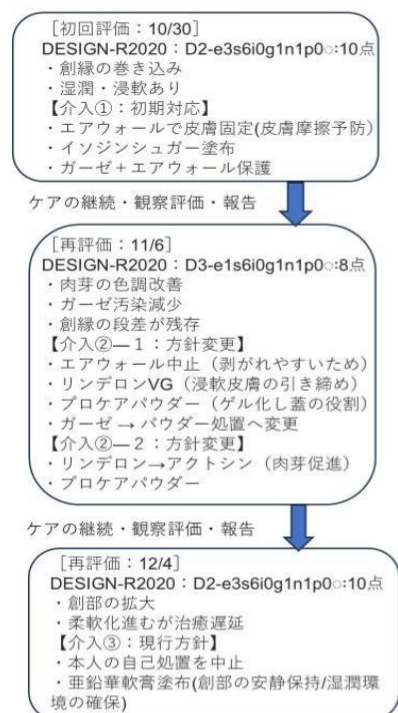


取り組みの成果

ICTを活用した看護師連携で褥瘡ケアが向上。創部安定と在宅支援強化につながり、今後は連携の標準化を目指す。

LINE WORKSの活用によりデイサービス看護師と訪問看護師・訪問診療医との連携が迅速かつ的確に行えるようになった。創部写真を共有することで経過を瞬時に把握でき、PDCAサイクルを効率的に回すことが可能になった。また、認定看護師とのつながりによりデイサービス単独では難しい難治性褥瘡への専門的視点が加わりケアの質が向上した。結果として創部は安定し感染や悪化を防止し、利用者・家族の安心につながった。情報の「発見→連携→共有→実践」の流れが確立し、デイサービスでも在宅医療を支える一員であるという実感と自信が生まれた。今後はICTを活用した連携をさらに広げ、複数事業所間で標準化されたケアと継続した支援の仕組みを構築したい。

看護連携後の褥瘡ケアの経過



社員間のコミュニケーションの現状を知る

私たち

部署： 大和ユニット，天羽ユニット，香芝CM
施設名： 和里(にこり)香芝
報告者： 村島 亮吾・隠岐 久美・菊山 経和

取り組みのねらい

「渡し手」と「受け手」の相互理解でバトンをつなぎ、
遅延のない情報伝達と円滑な連携を目指す。

社員によって、申し送りが適切に伝えられていないことがあり、伝達が遅れ、困ることがあった。

そこで、人と人との関係性が状況を変えるのではないかと考え、社員間のコミュニケーションの現状についてのアンケートを実施し、考察する。社員間のコミュニケーションや業務の申し送り、報告・連絡・相談時の「渡す側」と「受け取る側」、相互の意識をアンケートで明らかにし、客観的に評価を行い、「バトン」としてつなげることを目的とする。

取り組みの内容

コミュニケーションや業務の意識調査アンケートを実施する。

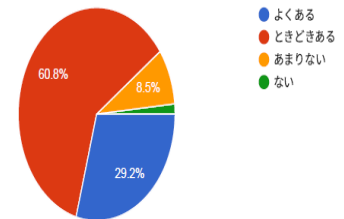
- ・ 期間：令和7年9月3日～9月13日
- ・ 支援職，看護職，総務職，栄養職，機能訓練職の194名を対象。
- ・ 社員間のコミュニケーションや業務の申し送り，報告・連絡・相談時の渡す側と受け取る側，お互いの意識はどうか，アンケートを実施する。

取り組みの成果

- ・アンケートにより、申し送りなどを受け取る側と渡す側の意識を把握することができた。
- ・アンケート結果は、194名中130名の回答であった。

1-1 職員間の申し送り・伝達がうまくいっていると感じていますか？

130 件の回答



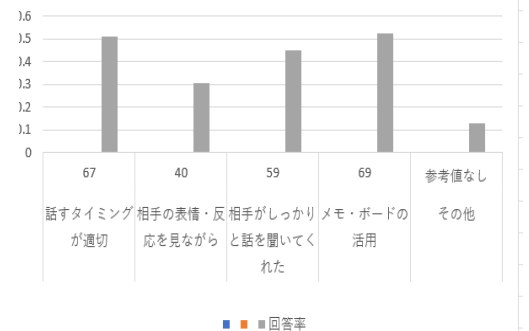
全体の傾向として、「おおむねうまくいっているが、忙しさや方法によって失敗が起こる」構造が見受けられた。

うまくいく要因としては、「話すタイミングが適切」「傾聴」「メモなどの視覚的補助」「確認作業」が成功につながっている。一方、「時間不足」「仕組み不足」「社員による理解の差」「確認不足」がうまくいかない要因との回答だった。

コミュニケーションの方法を見ると、「否定しない」「笑顔」「傾聴」が職場の雰囲気大きく左右しており、申し送りや伝達をしやすくする仕組みの強化が必要である。

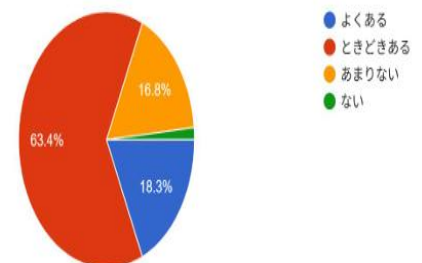
したがって、よりよくバトンをつないでいくためには、「個人の努力」から「チームの仕組みづくり」へと発展させていくことが「質の高いケアを安定して提供するための基盤強化につながる」と考える。

うまくいったと感じたときの要因



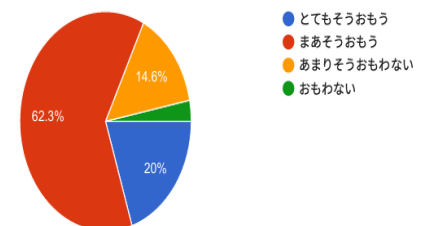
1-3 伝達や申し送りがうまくいかなかったと感じた経験はありますか？

131 件の回答



2-1 日常的に職員同士で相談・報告・雑談などがしやすい雰囲気だと思いますか？

130 件の回答



引継ぎシートの作成 ～大切な情報を次のケアへ～

私たち

部署： 万葉ユニット, 飛龍ユニット, SW

施設名： 和里(にこり)香芝

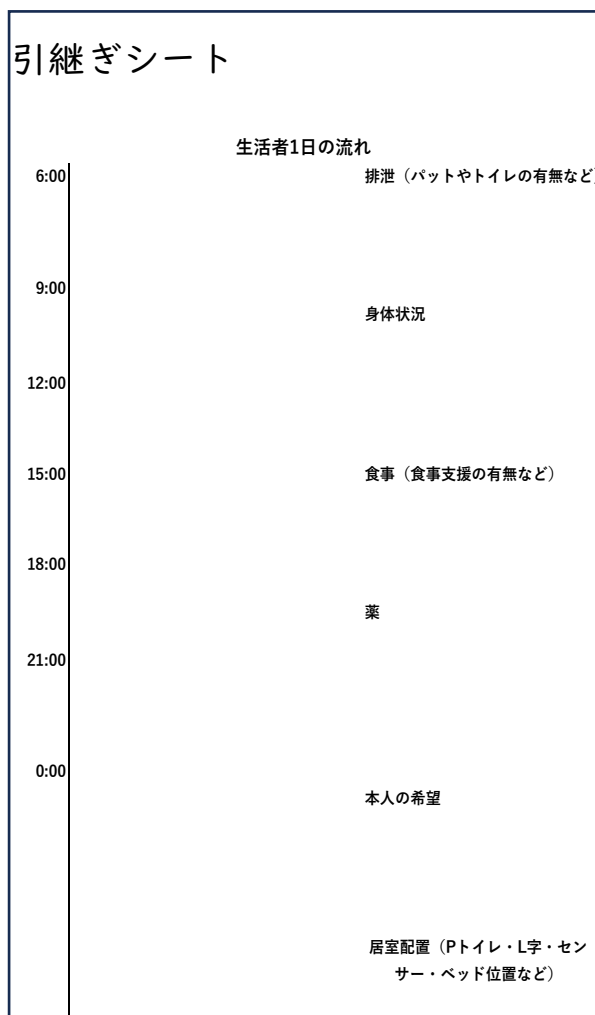
報告者： 川田 大地・大橋 正弥・栗牧 智子

取り組みのねらい

ショートステイ利用者が特養空床利用するときに円滑な情報共有をするために引継ぎシートを作成する

ショートステイ利用者が特養に空床利用をされるとき、情報が伝わっていないことがある。事前に複数枚あるフェースシートは確認するが、短時間で情報を読み取るには特養所属社員の経験値も問われ、情報量が多くわかりにくいことも問題である。

今回、ショートステイ利用者の1日の流れを短時間で把握するために1枚の引継ぎシート作成し、特養空床利用のときも安心して利用していただけるようになると考える。この取り組みを通じて、利用者に対して新たなニーズの発見や、その人らしい生活ができるよう社員間で「バトン」をつなぐように共有し、継続的な支援につなげていくことを目的とする。



取り組みの内容

引継ぎシートを作成し活用する

実践期間中、特養空所利用者がおられず、今回は作成と活用を目標としてショートステイ新規利用者2名を対象に万葉ユニット（ショートステイユニット）での実践をおこなった。

- ① ショートステイ社員が1日の流れを把握するためフェースシート・家族様・ご本人からの情報をもとに、1ページ目の引継ぎシートを作成。
- ② 対応する社員間で引継ぎシートを共有、支援の際に加筆修正をしながら活用。
- ③ 実際にユニットで引継ぎシートを作成、活用できた社員を対象に聞き取り調査を実施し、調査結果を右の図のようにまとめた。

調査結果

良かった点

- ・身体状況の把握から適切な声掛けができた
- ・1日を通して、どう支援すべきか、わかりやすく支援できた
- ・ご本人のご要望を把握でき、対応できた
- ・2回目のご利用で初めて対応したが、生活リズム表をみて支援の補助として使えた

改善点

- ・生活リズム表の項目を詳細にした
- ・忙しい日には常時確認できず、1日の流れが使えない時があった
- ・完全にはご利用者のニーズを把握できていない

取り組みの成果

正確な情報の共有がおこなえた。

良かった点は「身体状況の把握から適切な声掛けができた」「利用者の要望を把握し対応できた」などがあった。改善点は、「項目の詳細化」「忙しい日の活用方法」などがあった。今後は改善点を反映させた右の図を活用し、特養空床利用があったときには、これまでのショートステイ利用時の情報のバトンを実際に特養へつなぎ、質の高い支援を目指していきたい。

修正した引継ぎシート

生活者1日の流れ	
6:00	排泄 バット： トイレ：
9:00	身体状況 視力：
12:00	聴力： 歩行：
15:00	麻痺(有・無)： 食事 食事形態：
18:00	飲み物：
21:00	飲み薬(有・無)： 飲み薬以外の薬：
0:00	本人の希望
	居室配置(Pトイレ・L字・セン サニ・ベッド位置など) Pトイレ(有・無) L字欄(有・無)

“バトン” でつなぐ支援 ～その人らしい暮らしをチームで支える

私たち

部署： 和里（にこり）香芝デイ，居宅

施設名： 和里（にこり）香芝デイサービスセンター

報告者： 今西 久美，小倉 麻理

取り組みのねらい

利用者の思いに丁寧に耳を傾け，それをチーム全体で共有しながら次の支援へと“バトン”のようにつないでいく体制づくりを目指した。個々の背景を起点に，多職種が連携して継続的な支援につなげる仕組みの構築をねらいとした。

背景・課題：

対象者は90歳代の男性で，認知機能は保たれていたが高度の難聴があり，一人暮らしで交流が乏しい状況にあった。「言葉を忘れそう」と不安を抱え，性格的なこだわりもあり，通所が安定しない時期もみられた。入浴やパソコン，庭木の剪定を楽しみにしていた一方で，食事意欲は低く，食事量は少量の雑炊に限られ，るい瘦が進行していた。酸素飽和度も低値であったが受診を拒まれており，身体機能の低下と「その人らしい暮らし」の維持が難しくなることが懸念され，多面的な支援が必要であった。

取り組みの内容

本人の生活に寄り添い，多職種が連携して「その人らしい暮らし」を維持するため，食事・会話・身体機能の三領域で支援目標を設定し，チームで取り組んだ。

① 食事面

食欲低下と摂取量の少なさに対し，希望を踏まえて卵入り雑炊を提供。副食は小鉢に少量盛り付けるなど調理師と協力し，無理なく摂取できるよう工夫した。



② 会話面

落ち着いて話せる環境を整えるため、静かで景色の見える場所へ案内し、ご本人のペースを尊重しながら会話時間を確保。安心して思いを話せる関係づくりを進めた。



③ 身体機能面

剪定継続に必要な体力維持を目的に、酸素飽和度を確認しながら体操・歩行訓練を実施。無理なく続けられるよう、その日の体調に合わせて調整した。

取り組みの成果・達成度

① 食事面

当初少量だった食事量は全量摂取へ改善し、「おいしかった」との言葉も増えた。酸素飽和度も92~94%で安定し、身体状態の改善がみられた。

② 会話面

静かな環境で会話がしやすくなり、過去の経験や思いを語る機会が増えた。同席者との交流も広がり、カラオケにも初挑戦するなど積極性がみられた。



③ 身体機能面

体操・歩行訓練の継続により体力が維持され、屋外での剪定作業を今までどおり続けられている。楽しみの継続が「その人らしい暮らし」につながった。



【終わりに】

思いをチームで共有し、支援のバトンとしてつないでいくことで、支援の質向上につながる。今後もこの連携を大切にしながら「その人らしい暮らし」を支える実践を広げてきたい。

引き継ぎを確実にを行い，社員間で情報共有する

私たち

部署： 香具ユニット，畝傍ユニット

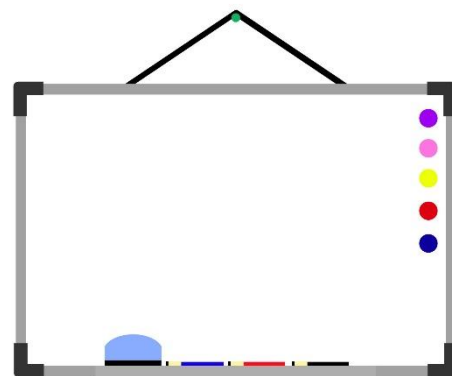
施設名： 和里（にこり）香芝Ⅱ

報告者： 染野 光代 中川 忠勝 ゾー ティ ホア

取り組みのねらい

日々の申し送りで生活者の様子や支援内容の追加・変更等を確実に引き継ぎ，社員間のミスによる事故が起こらないようにする。

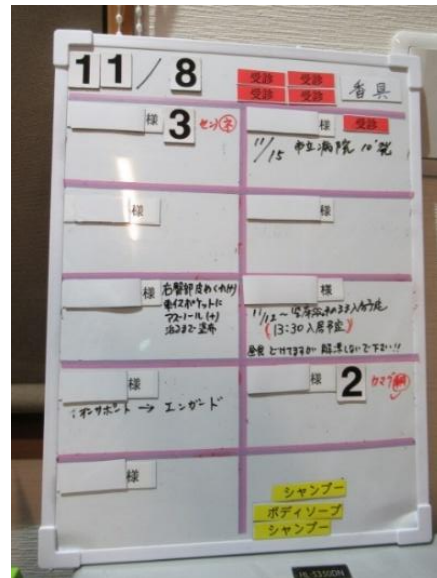
介護における申し送りとは，前任者が後任者へ生活者の状態，ケアの内容，注意事項を伝えることである。主な目的としては，①継続的なケアの提供を行うため，生活者一人ひとりの状態やニーズを把握し，適切なケアを漏れなく継続する。②事故を防止するため体調の変化やリスクに関する情報を正確に伝える。③社員間で情報共有することで，質の高いケアを提供し，業務の効率化を図ること。現状での申し送りは口頭のみで行っているが，以前に受診予定日がカレンダーに記入されてなかったことや，申し送り事項が社員に伝わっていなかったことがあり，完全に情報共有ができていなかった。その日の申し送りを聞いていても生活者の支援中，時間に余裕がないと，便秘時の頓服や受診出発時間を忘れてしまうことがあるため，情報をホワイトボードに記入し，口頭での申し送りに加えてホワイトボードを確認することで事故やミスが起こらないようにしたいと考えた。



取り組みの内容

申し送り時、口頭に加えてホワイトボードを活用し申し送り事項を記入する。追加・変更事項があればリアルタイムに更新する。

最初はホワイトボードの左端から生活者名と申し送り事項（便秘日数, 受診予定日, 連絡事項）を箇条書きに記入するというシンプルな形であったが、これだと文字が見にくかったり、擦れて読みにくくなったりした。そのため外国人社員を含めた社員全員が見やすくなるようにレイアウトを変更



- ・生活者の居室順に枠を仕切る。
- ・項目により色を変える。
- ・できるだけ手書きをやめる（文字はテプラ, 数字などは印刷されたマグネットシートを活用）

取り組みの成果

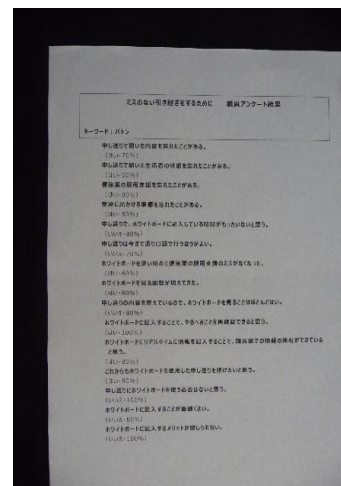
畝傍, 香具の社員にアンケートを実施, 社員間でリアルタイムに情報共有ができていたとの意見が8割で, 事故やミスも起こっていない。

ミスのない引継ぎをするため、口頭に加えてホワイトボードを活用して申し送りを行うことを6月20日からスタート, 慣れるまでは見にくい, 記入する時間がない等の声があったが, 9月末にアンケートを実施したところ,

ホワイトボードを見る回数が増えてきた, 便秘薬の服用支援のミスがなくなった, ホワイトボードに記入することで, やるべきことを再確認できた, リアルタイムに情報を記入することで, 社員間での情報共有ができていた等の回答があった。

今後の申し送りにおいても, 口頭と合わせてホワイトボードを活用した申し送りを行い, 社員間でリアルタイムな情報共有することで引継ぎのミスをなくし, 事故が起こらないようにしていきたい。

アンケート結果



口腔ケアを強化することで口臭改善を目指す

私たち

部署： 耳成ユニット，CM

施設名： 和里（にこり）香芝Ⅱ

報告者： 植田 紘子、永田 明香、グエンティガーン

取り組みのねらい

歯科衛生士による生活者の状態に合わせた正しい口腔ケアの指導を受け、そのケアを行うことで、口臭を改善したい

日常生活における口腔ケアは、口の中を清潔に保つだけではなく、全身の健康維持や生活の質の向上につながる大切なケアである。口腔ケアを続けることで、虫歯や歯周病、口臭を予防し、誤嚥性肺炎などの全身疾患の予防にもつながり、高齢者の健康を支える上で欠かせない。

口腔内に問題があると、唾液の分泌量が減少し、粘り気・乾燥しやすくなること、歯・歯茎に異常が出て咀嚼・嚥下機能が低下し、低栄養や誤嚥性肺炎にもつながる。会話がスムーズにできなくなり、食事を楽しめず、生活の質の低下にもつながる。

適切な口腔ケアを継続して行うことは「食べる喜び」や「話す楽しみ」を守ることにともつながり、一人ひとりの状態に合わせた丁寧なケアを通して「美味しく」「楽しく」「安心して」過ごせる毎日を支えていきたいと考えた。今回は口臭改善を目指して取り組んだ。



取り組みの内容

口臭チェックを通して口腔ケアの効果を確認し、継続的なケアの向上を目指す

【期間】 令和7年7月22日～9月27日

【対象】 生活者5名 全員が自歯であり、義歯は使用していない。

【方法】 口臭チェッカーを使用し、口臭チェックを行う。実践回数3回：実践前・実践中・実践後で行う。



判定結果はLEDでお知らせ ●●●●●

レベル	LEDランプの状態	においの程度
0	● ○ ○ ○ ○	においは感じません。
1	● ● ○ ○ ○	弱いにおいを感ずます。
2	● ● ● ○ ○	においを感ずます。
3	● ● ● ● ○	強いにおいを感ずる時があります。
4	● ● ● ● ●	強いにおいを感ずます。
5	● ● ● ● ●	非常に強いにおいを感ずます。

7月22日 口臭チェックを実施した。測定後、歯科衛生士の口腔ケア方法を動画撮影し、その方法で8月1日から口腔ケア実施。8月20日に再度歯科衛生士より指導を受ける。9月27日に実践後の口臭チェックを行った。

取り組みの成果

口臭が改善したため、今後も同様のケアを継続・共有していく

社員が声をかけながら丁寧に対応することで、測定を勧めることができた。会話をしない、言葉が分かりにくい方もいるため、測定するのが少し難しく感じる場面もあった。「経管栄養の方は口臭が強いのではないか」と思っていたが、実際に測定してみると、経口摂取の方が口臭が強い結果となった。

利用者	栄養形態	口臭レベル		
		実践前	実践中	実践後
A様	経口	5	1	2
B様	経口	4	5	2
C様	経口	5	4	2
D様	経管	2	2	1
E様	経管	1	1	1

1日から歯間ブラシを使用したケアを行ったが、ケアを続けることが難しく、20日から歯ブラシを中心とした口腔ケアを行った。A様・B様・C様は実践を重ねるごとに口臭レベルの改善が見られた。D様・E様は大きな変化は見られなかったが、歯科衛生士より「口臭が軽くなり、出血も少なくなっている」と言葉をいただいた。現在もこの取り組みを継続しており、今後新しく配属される社員にも同じようなケアを行えるようにバトンとしてつなげたいと思う。

